

「子育てにおける科学的根拠とは」



鎌田基予子教育委員

教育委員も二期目に突入し、早1年4ヶ月が経ちました。学校(こども園)現場で日々行われている集団での学びが、確実に恵那市の子供たちを育てていることを確信しているところです。

さて、教育経済学すなわち、「データを用いて教育を科学的に分析する」研究がやっと日本でも注目され始めているという興味深い話についてです。日本では教育について「一億総評論家」状態で、個人の子育て成功例や主観に基づく持論で教育が語られてきたきらいがあります。例えば私自身、◎ご褒美で釣ってはいけません。◎ほめ育てはした方がよい。この二点に関してそれこそ根拠のない確信のもとに迷える

時も貫いてきましたが、大規模なデータを用いる教育経済学の分析によりますと→ご褒美で釣ってもよい。→ほめ育てはしてはいけません。と、正反対の答えが出されていてかなり驚きました。ただここで誤解を招いてはいけません、◎結果ではなく、どんな行為に対してのご褒美であるのか。また、◎ほめてはいけませんが「ほめ方」が大事である。といったところまで理解がなされていることが必要であるということです。子供たちはその特性や能力、育った環境(長子、末っ子である)などのさまざまな要因によってひとりひとりが全く異なりますので、やはりその子に合った対応を常に悩みながら選択していかなければなりません。そこには明確な答えも用意されておらず、結局その過程がとても大事な子育てなのだと思います。お手頃なもので楽をして効果を得ようなどと子育てを軽んじたならば、その将来に何らかの代償を払うことになりかねない。これは私の主観ではなく科学的根拠に基づく事例の一つです。

やはり幼少期、少なくとも小学校低学年までは親が子供としっかり向き合うことが、全ての教育のベースになりそうです。

教育委員視察研修

教育委員会では、他市における学校の現状や先進的な取り組み等を把握し、今後の教育行政の参考にするために視察研修を実施しています。

平成29年度は東海北陸社会教育研究大会において富山県立美術館館長の記念講演を拝聴しました。また、コミュニティスクールの先進地でもある富山市立堀川中学校においては、コミュニティスクールの方向性や文部科学省のモデル校当初から現在までの変容、地域交流活動を通しての成果と課題について、富山市教育委員会からは教育委員会としての取り組みについて視察研修を行いました。

富山市立堀川中学校では、地域の教育力や学習支援等の支援を得る活動を充実させるためには、中学校の3年間では短すぎるため、小・中学校の円滑な接続と義務教育9年間を見通した取り組み、またスクールソーシャルワーカーが校区の小中連携協議会の部会に参加することで、支援体制の拡充に繋がり、関係機関や施設との情報を得ることができるなどの連携が図られている。当市においても2中学校区で立ち上げたコミュニティスクールでも取り組めるように推進していきたいと思いました。



富山市立堀川中学校へ視察研修

「絵本の世界」にひたって遊び込む



恵那市の幼児教育の4本の柱に「読書活動（読み聞かせ）」があります。今年度も、各園で「絵本」を活用した活動に取り組みました。

武並こども園の3歳児の活動では、子どもたちの大好きな「大型絵本」の読み聞かせで始まりました。次の場面を期待する園児の表情がとてよかったです。また、先生の読み聞かせに合わせて、覚えている言葉を唱えながら、聞く姿もありました。「絵本の世界」に浸り、遊びを展開しました。その絵本の中のかえるやとんびに変身し、運動あそびを入れながら、みんなで鬼ごっこをしました。遊びに入るのが

苦手な園児も先生の支援を受けながら、少しずつ遊びに参加しました。3歳児では、「みんなと活動すると楽しい」と実感する事が大切です。そして、最後にもう一度、

「絵本の世界」に入り込み、楽しかった活動の終了となりました。こうした経験を積み、園児は、また素敵な絵本に出会うこと、友だちと関わって遊ぶことを通して成長していきます。

この活動のように、保育教諭の環境作りの工夫や援助の仕方を考えていくことが、園児の遊びを充実させます。今後も遊びを変化させながら、遊びを深めていく…遊び込むことが園児の主体性や社会性につながって行くと感じています。



恵那市のこども園は、平成29年で3年目を迎えました。現在15園で、恵那市の教育が目指す「主体性・社会性・郷土愛」を育むため、教育委員会訪問や日々の訪問、また各種研修会等を通して、質の高い幼児教育の推進に向けた取組の充実を図っています。

新たな地産地消食材の発掘

*** 恵那市学校給食センター ***

学校給食センターは、市農政課と協力して「地産地消」に取り組んでいます。「地産地消」とは、地元で生産されたものを地元で消費するという事業で、学校給食では、給食に使用される米はすべて恵那市内で生産されたものを使用しています。夏場には農家で生産された野菜も使用しています。

1月24日～30日は、全国学校給食週間となっており、市でも市内の4つの学校給食センターで29日と30日に給食フェアを行いました。冬場で野菜の少ない中、地元の食材を農政課とともに発掘し、「黒米」「ゆず」「みうら豚」「いちご」「りんご」「キウイフルーツ」を新たに給食のメニューに取り入れました。「えなハヤシチュー」で使用された山岡寒天の生産農家さんと、「白菜の柚子香和え」に使用されたゆず果汁生産業者のかさぎゆず組合さんが会場に訪れ、生産時に苦労したことや料理に使用するときのコツ、新たな料理方法などを話されました。その後、小さなお子さんを連れたお母さんや、おじいさん、おばあさんと一緒に給食を食べられ、皆さんから「おいしかった」の声をいただいていた。

今後もさらに地産地消に取り組み、子ども達に地元食材のおいしさを伝えていきたいと思ひます。



【かさぎゆず組合からの説明】



【給食フェアの試食会】

